



No.26

びびぎ

ドラム缶工業会会報

ドラム缶工業会の2000年活動方針について

さる1月12日(水)、ドラム缶工業会の賀詞交歓会が鉄鋼会館において開催され、工業会を代表して挨拶に立った安達理事長は、ドラム缶工業会の本年の課題・活動方針について大要次のように述べました。

昨年をふりかえってみると、長く低迷が続けてきた日本経済もようやく緩やかな回復の兆しを見せ、3年ぶりのプラス成長となった。当業界も、この影響を受けて200Lドラム缶の生産は1999暦年で1,220万本程度と約7%の増加を見、またペール缶も2,470万本、約2%の増となったと考えられる。鋼材ベースに直せば34万トン、約6%増となる。しかし、更生缶の分野では約4%強のマイナスと聞いており、ドラム缶全体で見れば決して喜べる数字ではない。また、一昨年に比べればまだ水準は低く、ために雇用調整助成対象業種の継続指定を受けざるを得なかった。



挨拶される
安達理事長

なお、昨年はアメリカ/オランダでICDM国際会議が開かれたが、景気低迷の中であって日本及びアジアの皆さんが大勢参加した。議題の中では、米国新日鐵の藤社長がアンティ・ダンピング法に基づく提訴の不当性を堂々と喝破されたのが好評で印象に残った。

本年の見通しについては、政府の1.0%成長見通しなどが出ているが、ドラム缶業界にとっては、エチレンの減産見通しもあり、楽観できない。200Lドラム缶でいえば、本年上期は600万本弱、下期は若干の増をみこんで年間1,200万本の大台を確保し、ほぼ昨年並となるのではないかと考えている。従って需給の大幅改善は期待できず、依然として厳しい状況が続くと思わざるを得ない。

こうした中で工業会の本年の課題であるが、第一にドラム缶の有用性について改めて再認識していただく活動を展開したい。ドラム缶は更生缶も含めて2,600万本も供給されており、産業の毛細血管の役割を果たしている。そうした認識の上で、需要家の負託に応じて大胆なリストラを実施し、安価で良質な製品の提供に努めてきた。今後ともその役割を果たし安定供給を続けていくためには、たゆまぬコストダウン努力が必須であるが、需要家



の皆さんにもドラム缶の有用性を再認識いただくとともに、ロットの集約・マーキングの簡素化などの面でご協力をいただけるよう改めて理解活動を展開していきたい。

第二には更生缶業界との連携を挙げておきたい。ドラム缶はリサイクル率95%を誇る環境に優しい容器であるが、このうち75%は更生業界を経由するリユース缶であって、まさに更生缶あつての新缶業界といえる。今更生缶業界が抱える問題、すなわち需要の減退、塗料の重金属問題などは、我々新缶業界とも共通の問題として協調して解決に取り組んでいきたいと考えている。

第三点としては、国際的活動に積極的な役割を果たしていきたい。昨今グローバルスタンダードの波がドラム業界にも押し寄せてきている。当面、国連を舞台に最小板厚規制や振動試験導入などの問題があるが、更生缶業界とも連携をとり日本としての統一した考え方をきちんと主張していく必要がある。また11月には更生缶の国際会議が日本ドラム缶更生工業会の主催で行われる。この場を中心に、世界の新缶業界と更生缶業界の連携強化に向けて、強力な架け橋としての役割を果たしていくつもりである。

第四に工業会50周年に向けての準備を進めていく。2002年、サッカーワールドカップの年にわが工業会は50周年を迎えるが、この記念に50周年史を編纂すべく着々と準備中である。初の年史であるため一から資料収集にかかっているが、ご参集の先輩や関係諸氏のご支援・ご協力をお願いしたい。

以上本年の抱負を申し述べた。依然として厳しい状況の中、自助努力でこれを克服していくのは勿論だが、ユーザーの皆様や関係諸団体の方々の暖かいご支援が不可欠であるのも事実。絶大なご協力を賜るようお願いしたい。

本年の賀詞交歓会には、正会員、賛助会員のほか、役員OB、関係官庁、関係諸団体の方々を含む150名以上が参集する盛況となりました。そして理事長の挨拶に続き通商産業省基礎産業局奥田企画調査官、日本ドラム缶更生工業会本野会長のお二人からご挨拶をいただき、その後懇談会に移って、和気あいあいの内に活発な交流が行われました。



いざというときに役立つ防災グッズの収納缶「エマージェンシー・ドラム」は、中に暗い場所でもすぐに目に付く「発光テープ」など緊急時に頼りになるものが入っている。写真は昨年つくられた阪神タイガース・バージョンの「阪神缶」。(写真提供：川野 理氏)

ドラム缶のある風景



Dr. ドラムの “缶々学々” 講座

本号から、ドラム缶にまつわるさまざまな“情報”を学問仕立てに再構成し、Dr. ドラムが明解に回答する新シリーズをスタートします。

第一弾は、「統計学」ということで、ドラム缶の年間出荷本数にスポットを当てて見ました。

第1回：統計学の巻

縦に並べると富士山の約3千倍!?

——ドラム缶の代表選手といえれば200L缶。この200L缶は国内で1年間にどれくらい出荷されているのでしょうか?

Dr. ドラム 一番新しい資料によると、平成11年(1999)(暦年)に国内全体で200L缶は288,540トン出荷された

『ドラム缶工業会 50 周年史』 発刊へ向けて編纂進む

2002年(平成14年)9月の創立50周年を目指して50周年史の編纂を進めている「ドラム缶工業会50周年史編纂委員会」では、すでに基礎資料となる年表の作成を終え、構成案をまとめました。

次は、歴代理事長、歴代委員長、長老諸氏などへ個別インタビューを行う予定で、対象となる方々のスケジュールの検討に入っています。

また、装丁サンプル(つか見本)も作成され、去る1月26日の常任理事会に提出されました。同理事会では「A4判とする」、「文字は横組みとする」といった意見が出されましたが、装丁デザインなどは2002年初めに最終決定されます。

会員の皆様も、この50年間のドラム缶に関する情報資料、さらに製品や設備・機器などをお持ちでしたら、編纂委員会までご連絡ください。

編纂の様子は、今後もこの会報で報告してまいります。『ドラム缶工業会50周年史』にどうぞご期待ください。

「ドラム缶工業会50周年史編纂委員会」メンバー
委員長：中川義幸(日鐵ドラム(株)専務取締役)
委員：柴野正裕(ドラム缶工業会前事務局長)、郷 邦造(日鐵ドラム(株)、藤野泰弘(ドラム缶工業会事務局長)

編纂協力：化学工業日報社

(編纂委員会連絡先：TEL 03-3669-5141)

報告されておる。つまり年間に約29万トン出荷されているというわけじゃ。

——約29万トンと言われても、その数字がどれくらいのもなのか、素人にはピンとこないのですが……。

Dr. ドラム ドラム缶1本当たりの重さを平均単重ということを知っておるか。昭和40(1965)年に全国統計が取られるようになってから、技術の進歩でこの平均単重が年々少しずつ軽くなってきているのじゃ。昭和40年代前半は27~28kgだったものが、平成に入ってからは何と24kgを切るようになってきているのじゃ。ここ数年は約23.7kgということじゃから、約29万トンというのは約1,220万本という膨大な数なのじゃ。

——約1,220万本ですか!

Dr. ドラム そうじゃ。ドラム缶を1本ずつ縦にして積み重ねていったとすると、1本の高さが約89cmじゃから約1万kmにもなる。富士山の約3千倍、世界最高峰チョモランマの約1千倍以上というとても高い高さじゃ。もし、赤道にズラッと並べたとすると、赤道全周が約4万kmじゃから、地球の4分の1に達するというわけじゃ。

——おそれいりました。

DATA
FILE

平成11年(暦年) 出荷実績まとまる

—200L缶 前年比で6.9%増—

平成11年(1月～12月) ドラム缶・缶種別・用途別出荷本数

(単位:千本)

用途 缶種	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年比
200ℓ缶	2,014 (109.4)	9,053 (107.7)	612 (97.4)	155 (101.2)	356 (94.9)	12,190	106.9%
ペール	12,490 (100.9)	10,757 (103.3)	752 (102.2)		712 (99.2)	24,711	101.9
100ℓ缶	12	205	微		2	219	103.4
50ℓ缶		295			32	327	97.9
アス缶型	11	5				16	86.7
その他容量缶	2	526	1	1	15	545	112.1
200ℓ 小計	亜鉛鉄板缶	100	3	微	8	111	93.7
	ステンレス缶	微	20		微	20	149.3
	小計		120	3		8	131
100ℓ 小計	亜鉛鉄板缶		206	1	1	208	99.4
	ステンレス缶		7		1	8	60.1
	小計		213	1		2	216
合計	14,529	21,174	1,369	156	1,127	38,355	103.5
前年同期比	102.0	105.1	99.9	101.3	98.4	103.5	—
構成比	19.8	71.3	4.7	1.1	3.1	100.0	—

(注) 1.200ℓ缶、ペール缶の下端()は、前年比。

2.構成比は、ドラム缶の出荷トン数の構成比。

平成11年暦年の出荷実績は、右の表に示す通り、200L缶については、前年比106.9%と6.9%の増となった。この主な要因としては、石油関係が9.4%増、化学関係が7.7%増となったためであり、これには年末にかけて2000年対応のための在庫積増しが含まれていると考えられる。ただしこれを一昨年の数字と対比するとまだ0%と4.0%減の状態となっている。またペール缶については、前年比101.9%と1.9%の微増となっており、ドラム缶全体では、前年比103.5%となっている。



日本の正月と切っても切れないモチ(餅)、そのモチつきは、歳末の忙しさの中で何となく和やかな風景だった。最近では、そのモチをつく音も都会から消え、モチをつく風景を知らない都会の子供が多いという。

モチは、昔は食用のほか神仏へのお供えとして或いは円満の象徴として、鏡餅・望月等のモチに因んだ言葉があるように、生活に身近なものであったようだ。

正月の新聞のコラムで、民俗学者：石毛直道氏が、これも正月の子供の風物詩であった「凧上げ」について、本来は天(神)と地(人)を繋ぐ宗教的大人の行事であり、世界のある地域では、今日でもそのままの形で残っているという。

Y2K対応の影響もあって、今年の正月はわが家の食卓からおせち料理が消えた。“おせち”という言葉は、「御節供」の略で、五節句の朝廷での宴会の祝儀料理という。今日では、台所で働く主婦の労を、正月の三が

日だけ解放し、家族そろって正月を祝う為だと言われている。しかし電化器具や調理食品の流行、食文化の欧米化の中でおせちも遠のきつつある。

新しいミレニアムを迎え、前ミレニアムの奈良・平安朝時代からあったというモチは今や何となくインスタント食品の一種みたいになってしまったが、箸・だし・醤油等と共に、日本の食文化の象徴として大切にしたいと思う。(伊地知邦治 記)

トップの素顔

「いつかは日本全国をドライブ」



ダイカン株式会社
代表取締役社長 阿部 肇さん

仕事の関係で「大阪7：東京3の生活」といわれる阿部社長。小学校から大学まで東京だったため、多くのご友人が東京に。少ない時間の中、友人・友情を今も大切にされている。
——麻布で生まれ、杉並で育たれたそうですね。

戦争中の疎開も含めて、とにかく引越しの多かった羽田社長。平成6年に地元(?)大阪の近く尼崎へ。そして昨年、大同鉄器株の社長に就任され、ようやく一息。仕事にも趣味にも腰を落ち着けて取り組んでおられる。

——ご出身は大阪だそうですね。
★生まれは上本町ですが、物心ついた時には阿倍野橋、そして柏原、富田林、池田市と、大阪府内ではありますが、疎開も含めてよく動いたものです。池田市では中学1年から大学卒業までですからわりと長かったですね。

——就職されてからも転勤は多いのですか。
★皆さん同じだと思いますが、昭和34年に新日鉄(旧富士製鉄)広畑に入社し、その後名古屋・ロスアンゼルス・名古屋・東京(本社)・名古屋・相模原・富津・尼崎(大同鉄板)、そして現在に至っています。

——場所は変わっていますが、仕事は技術関係一筋だそうですね。

★はい、父が日本画の画家で、戦争中ということもあり生活が厳しかったので、とにかく「手

★2才頃から大学まで杉並でした。中学入学は昭和20年で、よく勉強したという記憶はありませんが、仲間意識は結構強く、今も最低でも年1回は同窓会で顔を合わせます。

——小・中・高に加えて大学時代のご友人もたくさんおられるとか。

★東京外国語大学でドイツ語を専攻した後、一橋大学で商法とポートを学びました(笑)。
——ポートではかなり活躍されたとうかがっていますが。

★がんばったのは社会人になってからです。安田火災に入社後、仕事よりもポートに熱中してしまいました(笑)。シングルスカルという一人乗りのもので、1957年から実業団選手権で3連覇したのです。1959年には日本選手権で現役大学生との決勝戦。惜しくも2位でしたが、故秩父宮妃殿下にご観戦いただいたのは光栄でした。

——その試合が引退試合だったのですか。

★はい、優勝するつもりでしたから、このあたりがピークかなと。

に職をつけろ、技術を身につけろ」といわれてそれを守った(笑)。仕事は主に表面処理鋼板の関係です。広畑時代は「ティンフリースティール」の開発当初で、ここ大同鉄器にも溶接の実験でよくおじゃましていました。

——仕事と同様趣味も一筋のものがあるとうかがっていますが。

★わりと多趣味で、女房と一緒に蘭や草花を育てたり、日曜大工、最近はパソコンも…。しかし、長く楽しんでいるのはヨットです。大学時代には関西インカレで優勝も。以来ヨットレースも大好きです。社会人になってからも名古屋～相模原時代の小休止はあったものの、ずっと続けています。ロスアンゼルス時代のお客様からは、「クレームがあるから来い」というので行ってみたら「一緒にヨットに乗ろう」などと笑話話みたいなのもありました。ヨットのお陰で良い仲間にも恵まれましたね。

——奥様とも一緒にセーリングされることもあるとか、うらやましい限りです。では最後

——その後は、専務として退任されるまで一貫して国際関係の仕事1本ですね。

★あらゆる大陸、主だった国々で仕事をしてきました。もともと旅行は好きでしたから、機会あるごとに海外の素晴らしいところを見ってきました。しかし、その上で日本の良さを再認識し、1993年から大阪に来たのをチャンスと思い、今は西国三十三箇所巡りに熱中しています。それもこの春には達成できそうです。

——奥様も旅行がお好きとか?

★年3、4回は一緒に旅行しています。家内も車の運転ができますから、いつかは二人で日本全国をドライブしてまわりたいと考えています。

——最後にモットーを。

★友人には相反すると笑われるのですが、かつてドイツ語に憧れたのは、ヘッセとヒューラーの影響が強いのです。ですからモットーは「常にロマンと闘争心を持ち続ける」ことですね。



大同鉄器株式会社
代表取締役社長 羽田 隆司さん

「夢はヨットでのんびり航海」

に夢とモットーをお願いします。

★夢はヨットでの長い航海、といってもせいぜい沖縄ですか。そしてモットーは「誠実」「相手を理解する」ということに尽きます。

会員

秋田ドラム工業(株) 川鉄コンテナ(株) 協和容器(株)
鋼管ドラム(株) 斎藤ドラム缶工業(株) 山陽ドラム缶工業(株)
新邦工業(株) ダイカン(株) 大同鉄器(株) 株東京ドラム罐製作所
東邦シートフレーム(株) 株長尾製缶所 日鐵ドラム(株)
株前田製作所 森島金属工業(株) 株山本工作所 株ユニコン
《賛助会員》

エノモト工業(株) 三恵マツオ(株) 丹南工業(株) 株大和鐵工所
三喜プレス工業(株) 株城内製作所 東邦工板(株) 株水上工作所

ドラム缶工業会

東京都中央区日本橋茅場町 3-2-10
(鉄鋼会館3階)
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

ひびき No.26 (平成12年2月21日発行)

発行人 ドラム缶工業会
事務局長 藤野 泰弘

本誌は再生紙を使用しています。